

## 総合研究報告書

児童虐待対策における行政・医療・刑事司法の連携推進のための  
協同面接・系統的全身診察の実態調査及び  
虐待による乳幼児頭部外傷の立証に関する研究

研究代表者 山田 不二子 国立大学法人東京医科歯科大学 医学部 非常勤講師  
認定 NPO 法人チャイルドファーストジャパン 理事長

### 研究要旨

性虐待や虐待による乳幼児頭部外傷（Abusive Head Trauma in Infants and Children、以下 AHT）のように、体表外傷が生じにくく、被害児本人から被害内容の開示を得ることが難しい虐待の場合、その立証は困難を極める。この状況に鑑み、本研究は、性虐待や AHT を立証するための方法論を確立し、児童虐待防止対策に資することを目的とする。

性虐待等、子どもからの聞き取りが重要となる虐待については、2015 年 10 月 28 日発出の通知によって児童相談所・警察・検察の三者連携に基づく協同面接の運用が開始された。また、虐待立証のためには専門的訓練を受けた医師による系統的全身診察も重要となるが、協同面接や系統的全身診察を提供すべき子どもたちに、これらが十分に行き届いているかどうかは不明である。

そこで、本研究では、テーマ 1 として、2021 年度は性虐待に対して先進的な取り組みを実践している施設を対象にアンケート調査とグループヒアリングを行い、この結果と 2020 年度までの調査結果をもとに『協同面接と系統的全身診察の手引き』を作成し、関係機関に配布した。

次に、AHT についてであるが、2016 年 10 月にスウェーデンの研究者によって「乳幼児揺さぶられ症候群（Shaken Baby Syndrome、以下 SBS。なお、SBS は 2 歳未満の AHT の大半を占める）には科学的根拠が欠ける」とする SBU レポートが公表された。これによって、AHT/SBS は実在するか否かという論争に拍車がかかり、それに基づく混乱の結果、日本の刑事裁判において無罪判決が複数認められる。

そこで、本研究では、テーマ 2 として AHT の事件捜査や刑事裁判における犯罪立証のために、医療と刑事司法とがどのように連携すればよいのかを本研究で明らかにするとともに、テーマ 3 では、AHT の中でも SBS で特に重要とされる回転性加速減速運動が乳幼児にもたらす病態生理の解明を目指す。

テーマ 2 では、2019 年度に実施した「AHT に関する医師の意識調査」、ならびに、2020 年度から 2021 年度かけて実施した「AHT 診断アルゴリズム作成のための医療情報調査および AHT の司法連携調査」をもとに、臨床医の診断へのアプローチの現状、実際の症例の理学所見や画像所見等の臨床像解析結果を踏まえて、『AHT 診断アルゴリズム（診断の手引き）』を作成し、関係機関に配布した。

テーマ 3 のうち、テーマ 3A では 2021 年度末までの間に AHT 症例の脳脊髄液と血漿を人体試料としてケミカルメディエーターとバイオマーカーの分析とメタボローム解析を実施し、テーマ 3B では MRS（Magnetic Resonance Spectroscopy：磁気共鳴分光法）を用いて傷害部位別に脳代謝も分析する予定であったが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックの影響で、ほとんどの共同研究施設がその対応に追われ、頭部外傷症例を受け入れることが困難であったため、テーマ 3A で 5 検体が集まったのみで、テーマ 3B の症例は集まらなかった。

#### 研究分担者

毎原 敏郎	兵庫県立尼崎総合医療センター 小児科 科長
丸山 朋子	大阪急性期・総合医療センター 小児科・新生児科 副部長
高橋 英城	東京医科大学病院 小児科・思春期科学 助教
田上 幸治	神奈川県立こども医療センター 総合診療科 患者家族支援部長

#### A. 研究目的

性虐待や AHT（虐待による乳幼児頭部外傷）のように、体表外傷が生じにくく、被害児本人から被害内容の開示を得ることが難しい虐待の場合、その立証は困難を極める。そこで、本研究は、虐待を立証するための方法論を確立し、児童虐待防止対策に資することを目的とする。

性虐待等、子どもからの聞き取りが重要となる虐待については、2015 年 10 月 28 日発出の通知によって児童相談所・警察・検察の三者連携に基づく協同面接の運用が開始された。また、虐待立証のためには専門的訓練を受けた医師による系統的全身診察も重要となるが、協同面接や系統的全身診察を提供すべき子どもたちに、これらが十分に行き届いているかどうかは不明である。

そこで、本研究では、テーマ 1 として、協同面接の実施状況やその成果に関する実態調査とともに、行政・医療・刑事司法との連携という観点から系統的全身診察の実態調査も実施し、その結果をもとに『協同面接と系統的全身診察の手引き』を作成して関係機関に配布する。

次に AHT についてであるが、2016 年 10 月にスウェーデンの研究者によって「SBS（乳幼児揺さぶられ症候群）には科学的根拠が欠ける」とする SBU レポートが公表された。これによって、AHT/SBS は実在するのか否かという論争に拍車がかかり、それに基づく混乱の結果、日本の刑事裁判においても無罪判決が複数認められる。

そこで、テーマ 2 として、AHT の事件捜査や刑事裁判における犯罪立証のために医療と刑事司法とがどのように連携すればよいのかを本研究で明らかにするとともに、テーマ 3 として、AHT の中でも SBS で特に重要とされる回転性加速減速運動が乳幼児にもたらす病態生理の解明を目指し、その結果をもとに『AHT 診断アルゴリズム（診断の手引き）』を作成して関係機関に配布する。

#### B. 研究方法

##### 1. テーマ 1

協同面接の実施状況やその成果に関する実態調査とともに、行政・医療・刑事司法との連携という観点から系統的全身診察の実態調査も実施する。2019 年度は一般社団法人日本子ども虐待医学会（以下、JaMSCAN）正会員に対して、2020 年度は全国の児童相談所と協同面接実施民間団体（以下、合わせて児童相談所等とする）に対して、実態調査票の送付と回収を行い、その結果を解析して課題を抽出する。2021 年度は 2019 年度～2020 年度に行った調査の結果にさらなる解析を加えたうえで、児童虐待や性暴力救援に積極的に取り組んでいる医療機関などを対象にした詳細な調査を行い、協同面接や系統的全身診察に対する新たな問題点やそれに対する方策を明らかにして、『協同面接と系統的全身診察の手引き』を作成し、これをもって児童相談所・警察・検察と医療機関の連携に関する提言とする。

##### 2. テーマ 2

2019 年度に JaMSCAN 正会員の医師を対象として、交通外傷を除く乳幼児頭部外傷に関する症例経験、意見聴取や鑑定書作成といった警察・検察への協力実態調査ならびに「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針における 5 類型病院の医師を対象とした AHT に関する意識調査を実施

施する。2020年度はAHTの診療経験、司法連携経験の多い医療機関において、「AHT診断アルゴリズム（診断の手引き）」を作成するための医療情報調査ならびに司法連携調査を実施し、調査結果を解析する。2021年度は引き続き、医療情報調査の画像読影ならびに司法連携調査を実施し、調査結果を解析する。さらに、『AHT診断アルゴリズム』を作成し、刑事司法との連携のあり方に関する提言をとりまとめる。

### 3. テーマ3

さまざまな要因で起こる小児の頭蓋内出血が、それぞれどのような機序で脳損傷を引き起こすのかを解明し、早期診断・治療に繋げることにより予後改善に努めること、および、脳損傷の機序が解明されることにより、頭蓋内に働いた外力を科学的に証明することを目的として、テーマ3Aでは主に、ケミカルメディエーターとバイオマーカーを取り扱い、AHT脳損傷の特異的物質を発見して特定するためにメタボローム解析を併用する。

テーマ3Bでは、MRS（Magnetic Resonance Spectroscopy：磁気共鳴分光法）検査を用いて、脳内代謝を取り扱う。

（倫理面への配慮）

すべてのテーマにおいて倫理審査委員会の承認を得たうえで、研究を実施した。

## C. 研究結果

### 1. テーマ1

『協同面接と系統的全身診察の手引き』を作成するための調査として、「児童相談所との連携に関するアンケート調査」「協同面接・性虐待と系統的全身診察および医療機関との連携に関する実態調査」（「児童相談所等への調査」「協同面接を実施した事例の調査」および「性虐待で協同面接等を実施しなかった事例の調査」の3種類）、「協同面接と系統的全身診察の実施状況に関する詳細調査」の3つを行った。

調査の対象はそれぞれ、一般社団法人日本子ども虐待医学会（JaMSCAN）に所属する正会員、全国の児童相談所と協同面接実施民間団体（以下、合わせて児童相談所等）、児童虐待対応における多機関連携の構築や性暴力救援の活動に取り組んでいる医療機関や施設（医療機関 12 病院とその関連機関 2 施設、協同面接実施民間団体 4 施設、児童相談所 1 施設）である。上記の調査では、医療機関・児童相談所・警察・検察の多機関連携には多くの課題があること、子どもの負担軽減という協同面接の本来の目的が事件捜査に取って代えられていて、子どもの福祉という観点を中心となっていないこと、児童虐待対応に取り組んでいる医療機関であっても協同面接への関与は少ないこと、医療機関が協同面接に関わることの重要性を明示し、児童相談所・警察・検察・医療機関で構成される4機関連携を推進する必要があること、系統的全身診察は協同面接とセットで行うべきであり、その意義に関する理解を各機関に周知する必要があることがわかった。

以上の調査結果を踏まえて、『協同面接と系統的全身診察の手引き』を作成し、全国の臨床研修病院・児童相談所・警察・検察に配布した。

### 2. テーマ2

「AHTに関する医師の意識調査」ならびに「AHT診断アルゴリズム作成のための医療情報調査およびAHTの司法連携調査」を行い、『AHT診断アルゴリズム（診断の手引き）』を作成した。

「AHTに関する医師の意識調査」は、「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針における5類型病院401施設に勤務する小児科・脳神経外科・救急診療科（以下、救急科）の医師897名を対象として調査を行い、小児科医148名、脳神経外科医120名、救急科医110名、所属不明1名の計379名より回答を得た（回答率39.1%）。問診、頸部画像検査の実施率、眼底検査の実施率はいずれも診療科による差異を認めた。また、児童相談所通告の割合に対して、警察通報の割合は低かった。

「AHT 診断アルゴリズム(診断の手引き)作成のための医療情報調査」は、症例群 15 医療機関 296 例(画像データ 253 例)、対照群 13 医療機関 100 例(画像データ 98 例)の回答があった。年齢は、症例群、対照群ともに 0~3 か月児が多かった(症例群 114 例、対照群 37 例)。頭部 CT 検査はほぼ全例で実施されていた。脳 MRI 検査は、症例群で実施率が高く(症例群 69.6%、対照群 44.0%)、頸部 CT・頸部 MRI はいずれも、症例群、対照群ともに実施率が低かった(それぞれ症例群 13.2%・11.5%、対照群 16.0%・12.0%)。全身骨 X 線写真は、症例群では約半数が初診時に撮影されていたが、対照群では実施率が 14.0%と低く、フォローアップの 2 週間後の撮影は症例群 6.4%、対照群 0.0%と低かった。硬膜下血腫は症例群に多く(症例群 72.0%、対照群 34.0%)、症例群では両側性の硬膜下血腫が 32.4%、大脳半球間裂の硬膜下血腫が 29.7%、小脳テント下の硬膜下血腫が 9.5%であった。頭蓋骨骨折は対照群に多かった(症例群 40.9%、対照群 74.0%)。症例群では眼底出血の頻度が明らかに高く(症例群 48.6%、対象群 5.0%)、症例群では、眼底出血ありの 144 例のうち、「出血が無数」が 63 例(43.8%)、「網膜全体に出血が及ぶ」が 34 例(23.6%)、「多層性」が 44 例(30.6%)であった。症例群、対照群の死亡割合に明らかな差はなかった(症例群 5.4%、対照群 5.0%)が、後遺症については症例群の方が多い傾向にあった。受診時に、保護者が受傷機転に関して何らかの説明をしたのは、症例群 63.9%、対照群 93.0%であった。虐待のカテゴリー分類は、対照群の 66.0%がカテゴリー 1 であったが、症例群はカテゴリー 3A 以上が半数を占めた。

「AHT 診断アルゴリズム作成のための司法連携調査」の調査票は 77 例の回答があり、最高検察庁に問い合わせのうえ、事件が特定され、公判記録の謄写可能と回答をいただいたのは 15 例であり、このうち 13 例の公判記録の閲覧・謄写を行った。

2019 年度に実施した「AHT に関する医師の意識調査」ならびに 2020 年度から 2021 年にかけて実施

した「AHT 診断アルゴリズム作成のための医療情報調査および AHT の司法連携調査」をもとに、臨床医の診断へのアプローチの現状、実症例の理学所見や画像所見等の臨床像解析結果を踏まえて、『AHT 診断アルゴリズム(診断の手引き)』を作成し、関係機関に配布した。

### 3. テーマ 3 A

倫理審査承認後から引き続き、検体を募っていたが、2021 年 11 月までは COVID-19 パンデミックの影響もあり、集まったのは 1 検体のみであった。

2021 年 12 月になって、COVID-19 が下火になった際に 2 検体送付されて計 3 検体となったが、検査機械を作動させることが高価であるため、さらに、検体が増えるのを待っていたところ、2022 年 3 月になり、さらに 2 検体送付されて合計 5 検体となり、実際に検査を実行することが可能となった。

サイトカインプロファイリング/タウ蛋白は東京医科大学 小児科研究室で検査を始め、メタボローム解析は東京医科大学 低侵襲医療開発総合センターで検査を行うにあたり、現在、設定を検討している。メタボローム解析では、外傷の程度によってさまざまな物質が検索できてしまうために、病態の中心に関わる物質同定については、詳細な設定が必要である。データがとり揃えば解析をし、頭蓋内出血の病態に対してアプローチすることが可能となる。

### 4. テーマ 3 B

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミックの影響もあり、症例が集まっていない。乳幼児に頭部 MRI 検査を行う場合、体動があると検査ができないので、鎮静薬を用いる。通常の施設では、MRS 検査をルーチンの MRI 検査に追加して行うため、途中で覚醒した場合、呼吸が不安定な子どもには施行できないことが多い。このことも症例が集まらなかった要因と考える。

## D. 考察

### 1. テーマ1

現在の協同面接は事件捜査が中心的な目的となっているが、子どもの福祉、すなわち、「虐待を受けたことが疑われる子どもはすべて、きちんとした形で大人に話を聴いてもらう権利がある」という点はもっと強調されるべきであろう。医療機関は子どもの福祉という立場から児童相談所に協力できる機関であるが、現在の日本では、児童相談所・警察・検察の3機関連携が原則となっているために、関与するという意識を医療機関も児童相談所・警察・検察も持っていない。平成27年10月に発出された通知と同様に、医療機関の関与についても何らかの根拠を公的に示すことが必要と考えられる。

協同面接の実施状況のみならず、その重要性の理解については、地域によって、また、機関によって大きな差がある。たとえば、被害児への聴き取りについて十分な配慮が必要であることについては、所轄署の警察官までは浸透していないと思われる。協同面接を実施するかどうかについては、刑事事件として事件化できるかどうかや、起訴できるかどうかではなく、子どもが受けた可能性のある被害をすべからく明らかにするという視点で判断されることが望ましい。

系統的全身診察の意義についても、協同面接とセットで行うものであるという認識を広める必要がある。

協同面接は、事前に判明している情報に基づいて、身体的な所見が得られにくい性虐待に重点を置いて実施されており、身体的虐待やネグレクトに関しては時間的な制約もあって十分に聴き取ることができていない。系統的全身診察はそれを補填するという意義もある。また、隠すつもりはなくても、「尋ねられなかったから答えなかった」という子どもも多いため、全身について問診と診察を行うことは有用である。

性器・肛門の診察は、小児科医が行うのか、他科

の医師の協力を得て行うのかは、個々の機関の実情に合わせて行なわれているのが現状である。しかし、系統的全身診察という方法を用いて「子どもの訴え・声をきちんと聴く」という技術は、小児科医として身に付けておくべき基本的かつ必要な診察・面接技術の一つであると考えられ、その普及が次の課題である。

とはいえ、現状では、その普及活動は特定非営利活動法人チャイルドファーストジャパンの山田不二子医師がほぼ一人で担っている。その負担を軽減して、より多くの医療機関で系統的全身診察が実施されるようになるためには、今回の手引きの配布とともに研修体制の充実が必要となる。

性虐待に関する医療機関への啓発活動も重要な課題である。一般社団法人日本子ども虐待医学会（JaMSCAN）では、2015年からBEAMS研修という医療機関向け虐待対応啓発プログラムを全国で展開している。2020年度から「虐待への対応」が医師臨床研修指導ガイドラインにおいて必修分野の1つに挙げられ、BEAMSがその研修方法の一つとして記載されていることから、今後はさらに開催回数が増えてくると考えられる。しかし、現時点でのBEAMS研修は身体的虐待への対応が中心となっているため、性虐待に焦点を当てた内容のものを作成する必要がある。

### 2. テーマ2

AHTは身体的虐待の中でも重症度が高く、子どもの生命・生活に重大な影響を及ぼすが、受傷機転がわかりにくく、医学的診断は難しい。しかし、児童相談所の事実確認や公判における立証において、医療の専門家として医師の果たす役割は大きく、医学的判断は重大である。

COVID-19流行に伴う諸事情や制限の中、「AHT診断アルゴリズム作成のための医療情報調査」は予定数を上回り、十分な症例数が確保できた。それにより、主たる医療機関で実施されている検査や診断の進め方が把握でき、親の申告す

る受傷機転と画像所見の特徴の傾向を把握することができた。また、画像検査については約 8 割の症例で画像データを提供していただき、研究分担者・研究協力者の小児科・脳神経外科・放射線科医師による多診療科読影を行うことが可能であった。

一方で、今回の調査の協力医療機関は AHT の症例数が多いと推定される医療機関であり、経験数の少ない医療機関の実態は異なる可能性も否定できない。また、今回の研究において、症例群の定義は、「交通外傷を除き、第三者目撃のない 2 歳未満の頭部外傷による入院患者（即時死亡例も含む）」かつ「児童相談所へ虐待通告をしている患者」、対照群の定義は、「第三者目撃のある 2 歳未満の頭部外傷による入院患者」とし、両群ともに画像検査で何らかの頭蓋内、頭部に病変を認めることとしているため、AHT の多くは症例群に含まれるが、症例群には目撃のない事故群が含まれ、また、事故群にも虐待例が含まれている可能性は否定できない。調査項目が限られることから、受傷機転や受診時の本人の状態の全容を把握することは困難であり、病態解明のために、さらなる調査が望ましいと考えられる症例も含まれていた。

「AHT 診断アルゴリズム作成のための司法連携調査」は最高検察庁に多大なるご協力をいただいで実施できたが、予定症例数に達することはできなかった。一つには COVID-19 流行に伴う諸事情や制限が考えられ、もう一つには保管期限を過ぎた公判記録は破棄されてしまうことが要因として考えられた。

本研究において、2 年半にわたり実施した「AHT に関する意識調査」および「AHT 診断アルゴリズム作成のための医療情報調査ならびに司法連携調査」の結果をもとに、実際の症例の医学的所見、臨床医の診断根拠、関係機関連携の実態を踏まえ、本研究の最大の目的であった『AHT 診断アルゴリズム（診断の手引き）』を作成した。AHT の診断・診療には、小児科・脳神経外科・救急診療科・放射

線科・眼科・整形外科・法医学など多数の診療科・専門家が関わる。今回、小児科・脳神経外科・救急診療科・放射線科という複数の診療科の医師の協力のもとで医療情報調査を実施し、画像読影も行い、小児科・脳神経外科・放射線科・法医学医師が共同で、『AHT 診断アルゴリズム（診断の手引き）』を作成したことの意義は大きいと考える。乳幼児頭部外傷の診療において、『AHT 診断アルゴリズム（診断の手引き）』が参考とされ、現場の医療資源や価値観から乖離することなく、全国の AHT 診断・診療に関する精度がさらに向上し、被虐待児への適切な支援に繋がることを願う。

### 3. テーマ 3 A

研究結果よって、頭部外傷の力学的エネルギーが回転性なのか、直達性なのかを判断できる可能性が示唆されれば、それを実証するための動物実験を行って証明していく。

これらの成果により、第三者目撃がない頭部外傷でも、力学エネルギーを予測することができ、病態に即した治療を選択すること、すなわち、回転性エネルギーの要素が強ければ、脳浮腫を早期に引き起こす可能性があり、外科的処置を含めた脳浮腫改善の治療を早期に選択することができるようになる。

また、回転性エネルギー外傷として児童虐待が鑑別に挙がるが、なかなか真相がわからないことが多い。当研究の成果によって、科学的知見に基づいた鑑別診断が可能となり、冤罪をなくすことに寄与する。

### 4. テーマ 3 B

米国でも、COVID-19 流行に伴い AHT の入院患者数は減少している<sup>1)</sup>。

また、頭部 MRI 検査は CT よりも撮影に多くの時間を要するため、静止できない乳幼児では薬剤を用いて鎮静したうえで検査を行う。そのため、被験者の負担などに配慮して、MRI 撮影を行った

症例でも、病状によっては、MRS 検査を追加して実施することができない症例もあったと考えられる。

- 1) Maassel NL, et al. Hospital admissions for AHT at children's hospitals during COVID-19. *Pediatrics*. 2021;148:1-3.

## E. 結論

### 1. テーマ 1

医療機関で被虐待児を診察する際に、協同面接との関係が重要であることを理解できていない機関は、医療機関自体も含めて、まだまだ多いと推察される。また、医療機関が適切な形で協同面接に関わることは、子どもの福祉という観点からも非常に重要である。

本研究で作成した『協同面接と系統的全身診察の手引き』を児童相談所・警察・検察だけではなく、全国の臨床研修病院にも配布した。児童虐待に関して、関係機関それぞれが専門機関としての役割を果たす一助となることを期待している。

### 2. テーマ 2

小児科医、脳神経外科医、救急医を対象に施行した「AHT に関する意識調査」および全国 15 か所の共同研究機関における 2 歳未満の頭部外傷症例についての「AHT 診断アルゴリズム作成のための医療情報調査および司法連携調査」の結果をもとに、実症例の医学的所見、臨床医の診断根拠、関係機関連携の実態を踏まえたうえで、『AHT 診断アルゴリズム (診断の手引き)』を作成した。乳幼児頭部外傷の診療において、『AHT 診断アルゴリズム (診断の手引き)』が参考とされ、現場の医療資源や価値観から乖離することなく、AHT 診断に関する精度が全国的にさらに向上し、被虐待児への適切な支援に繋がることを願う。

### 3. テーマ 3

小児頭部外傷において虐待か否かは、司法にお

いても論争の焦点であり、現在において科学的に完全に証明できないことが多い。

テーマ 3 A では 2022 年 3 月までに症例が 5 件集まったが、データの解析にまでは至らなかった。また、テーマ 3 B では残念ながら、症例が集まらず、現時点では脳浮腫の病態に関して新しい知見を導き出すことができなかったが、この研究で大きな進展があれば、児に対する治療方針や司法の論争に大きく貢献する可能性があり、社会的な経費の削減にも繋がる。

## F. 健康危険情報

特になし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

<英文>

- Takeo Fujiwara, Aya Isumi, Makiko Sampei, Fujiko Yamada, Yusuke Miyazaki. Effectiveness of using an educational video simulating the anatomical mechanism of shaking and smothering in a home-visit program to prevent self-reported infant abuse: A population-based quasi-experimental study in Japan. *Child Abuse and Neglect*. Available online January 13, 2020.
- Takeo Fujiwara, Aya Isumi, Makiko Sampei, Yusuke Miyazaki, Fujiko Yamada, Hisashi Noma, Kazuhide Ogita, Nobuaki Mitsuda. Effectiveness of an educational video in maternity wards to prevent self-reported shaking and smothering during the first week of age: A cluster randomized controlled trial. *Prevention Science*. Published online July 22, 2020.

<和文>

- 山田 不二子: 司法面接・系統的全身診察の在り方・CAC の実際. *小児科臨床*. 2019;72(12):1911-1915.

- ・ 山田 不二子：協同面接の現状と課題. 子どもの虐待とネグレクト. 2019;21(3):299-306.
  - ・ 山田 不二子：警察・検察との連携. 小児科臨床. 2019;72(12):1924-1930.
  - ・ 丸山 朋子：虐待による乳幼児頭部外傷 (AHT). 小児科臨床. 2019; 72(12):1871-1876.
  - ・ 山田 不二子：性虐待をどのように見つけるか. チャイルドヘルス. 2020;23(6):439-443.
  - ・ 山田 不二子：子どもの権利擁護センターの取り組み. 特集 児童虐待を学ぶ. 救急医学. 2020;44(11):1368-1373.
  - ・ 丸山 朋子：児童虐待に特徴的な身体所見 性的虐待の特徴. 特集 児童虐待を学ぶ. 救急医学. 2020;44(11):1442-1447.
  - ・ 丸山 朋子：虐待による乳幼児頭部外傷 (Abusive Head Trauma in Infants and Children). 日本臨床法医病理学会. 2020;26(2):83-92.
  - ・ 山田 不二子, 五十嵐 登, 宮坂 実木子, 溝口 史剛, 岩佐 嘉彦, 田崎 みどり, 大野 一郎, 犀川 太：医療者が虐待に向き合うということ. 特集 第 26 回学術集会 (いしかわ金沢大会) 大会企画シンポジウム. 子どもの虐待とネグレクト. 2021;23(2):160-174.
2. 学会発表
- ・ 山田 不二子, 田上 幸治, 栗原 八千代, 毎原 敏郎. 大会企画シンポジウム 7. 誰ひとり取り残さない! CAC (Children's Advocacy Center) モデルの構築に向けて. CAC 設立に向けた取り組みの現状. 日本子ども虐待防止学会第 27 回学術集会かながわ大会. 2021 年 12 月 5 日 (横浜)
  - ・ 丸山 朋子. 虐待による乳幼児頭部外傷 (AHT) に向き合うために知っておきたいこと S6-2 AHT について—小児科医の立場から—. 第 63 回日本小児神経学会学術集会. 2021 年 5 月 28 日 (福岡)
  - ・ 井原 哲. 虐待による乳幼児頭部外傷 (AHT) に向き合うために知っておきたいこと S6-3 AHT について—脳神経外科医の立場から—. 第 63 回日本小児神経学会学術集会. 2021 年 5 月 28 日 (福岡)
  - ・ 丸山 朋子, 溝口 史剛, 小橋 孝介, ほか. AHT に関する医師の意識調査. 第 34 回日本小児救急医学会学術集会. 2021 年 6 月 18~20 日 (奈良, web)
  - ・ 丸山 朋子. AHT を見逃さないために. 日本子ども虐待防止学会第 27 回学術集会かながわ大会. 2021 年 12 月 5 日 (横浜)
  - ・ 田上 幸治. 病院での MDT による AHT の対応 (神奈川こどもモデルについて). 日本子ども虐待防止学会第 27 回学術集会かながわ大会. 2021 年 12 月 5 日 (横浜)
  - ・ 溝口 史剛, ほか. 虐待による乳幼児頭部外傷 (AHT) の刑事司法手続き. 日本子ども虐待防止学会第 27 回学術集会かながわ大会. 2021 年 12 月 5 日 (横浜)
  - ・ 丸山 朋子, 溝口 史剛, 田上 幸治, ほか. 2 歳未満の乳幼児頭部外傷における医療情報調査. 第 125 回日本小児科学会学術集会. 2022 年 4 月 17 日 (福島, web)
3. その他(刊行物)
- ・ 山田 不二子, 毎原 敏郎. 協同面接と系統的全身診察の手引き. 2022 年 3 月 1 日
  - ・ 山田 不二子, 丸山 朋子. AHT 診断アルゴリズム (診断の手引き). 2022 年 3 月 1 日
  - ・ 山田 不二子：虐待の疑い. 小児一次救急マニュアル 帰宅可能か? 二次救急か? 判断の手引き. 編集 小児科編集委員会. 金原出版, 東京, pp. 210-221, 2019.
  - ・ 山田 不二子：性虐待と性暴力. 今日の小児治療指針 第 17 版. 医学書院, 東京, pp. 916-917, 2020.
  - ・ 山田 不二子: 2部 法制度の再構築を考える II セクシュアリティ・子どもからの法制度の再構築 7



章 子ども虐待対応に関する現行法の問題点と改正試案. 家族の変容と法制度の再構築 ジェンダー／セクシュアリティ／子どもの視点から. 二宮周平・風間 孝編著. 法律文化社, 京都, pp. 297-316, 2022.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

##### 1. 特許取得

特になし

##### 2. 実用新案登録

特になし

##### 3. その他

特になし